

平成 25 年度
広島市教育センター

社会科学習導入期における 社会参画を目指した学習の単元開発

－「自分とのつながりイメージ図」を活用し，地域社会とつながる
課題を追求した二方向からの単元構成を通して－

広島市立緑井小学校教諭 有森 歩

研究の要約

本研究は，社会科学習導入期の小学校第3学年において社会参画を目指した学習の単元開発を行ったものである。橋本（2013）は，社会参画を目指した学習を「社会改善の思考・判断」と「社会参加の態度」の二方向から捉えている。そこで，社会科学習導入期において二つの力をともに育成するために，地域社会とつながる課題の追求と単元を貫く学習問題を基盤にした学習過程のもと，児童の発達段階を踏まえた見学活動の設定と「自分とのつながりイメージ図」の活用をし，「わたしたちのくらしと商店のつながり」の単元を開発した。その結果，児童の社会的な見方・考え方の広がりや深まりによって，思考力・判断力が向上し，社会への関わり方を考えようとする態度が形成された。このことから二方向からの単元構成により，社会科学習導入期における社会参画を目指した学習が成立することが明らかになった。

キーワード：社会参画，思考力・判断力，態度，二方向，単元開発

I 問題の所在

社会参画の視点が今日的な教育課題の一つとして取り上げられたのは、1990年代の生涯学習分野に端を発している。学校教育においては、平成14年の「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策」に初めて登場した。この答申の考え方は、平成18年に改正された教育基本法、中央教育審議会答申における社会科改善の基本方針、次いで学習指導要領、学校教育法にも受け継がれており、社会参画の視点はまさに今の時代に欠かせない視点の一つであるといえる。

社会科においては、今回の学習指導要領の改訂に伴い、教科の究極目標である「公民的資質の基礎を養うこと」の説明として「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うこと」¹⁾と明記され、社会参画の視点が取り入れられている。上記のことから、日々の授業においては、児童の社会参画の力を高め、児童も社会の一員であることが実感できる授業づくりを目指してきた。しかし、社会参画を目指した授業とは何か、育成すべき力とは何か曖昧なまま実践を行ってきたこと、地域社会とつながる体験型・参加型の授業を取り入れながらも系統性がなかったことなどが課題であり、社会を担う一員であるという自覚を育てるまでに至っていない。

そこで本研究では、子どもたちが主体的に学び、社会の一員としての自覚をもち、単元の学習が終了しても学び続ける態度を形成する、社会参画を目指した学習について研究したいと考えた。

II 研究の目的

本研究は、地域社会とつながる課題を追求し、直接経験と「自分とのつながりイメージ図」を活用した二方向からの単元構成により、社会科学学習導入期における社会参画を目指した学習を行うことを目的とする。

III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 研究仮説の設定及び検証の視点
- 3 検証授業の計画・実施
- 4 検証授業の分析・考察

IV 研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 社会参画を目指した社会科学習について

社会参画を目指した学習については、研究の歴史が浅く、その全体像が明確になっていないが、学習指導要領を基本とし、研究者の理論から表1のように整理される。

表1 「社会参画を目指した学習」先行研究整理

社会参画を目指した学習	学習指導要領 ²⁾	よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う
	唐木、藤原(2010) ³⁾	社会参加学習
育成すべき力	橋本(2013) ⁴⁾	○その学習をすることにより、社会に関心を持ち、継続的に社会にかかわっていかこうとする姿勢を児童生徒に持たせる ○社会参画の二方向性に着目(社会改善の思考・判断力の育成、社会参加の態度の育成)、相乗効果によって参画の質が高まる
	唐木(2008) ⁵⁾	社会形成力
	澤井(2013) ⁶⁾	よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎としての思考力・判断力・表現力
学習方法	橋本(2013) ⁷⁾	社会改善の思考・判断力 社会参加の態度
	学習指導要領 ⁸⁾	問題解決的な学習
	唐木(2008) ⁹⁾	「プロジェクト型(問題把握→分析→意思決定→提案・参加)」

表1から本研究では、「よりよい社会の形成に向けて主体性をもって継続的に社会とかがかかわっていかこうとする姿勢を児童にもたせる学習」を「社会参画を目指した学習」と設定し、社会科学学習導入期の単元開発に生かせる点を導き出すこととする。

(2) 社会参画の力とは

橋本(2013)は社会参画を目指した学習として、中学校第2学年の授業づくりを行っている。その実践によると、「社会改善の思考・判断力の育成」と「社会参加の態度の育成」の相乗効果によって参画の質が高まるとしている。前者を育成する学習とは「社会の問題・課題・現状・意識が分かり、それらを判断する力を養い、行動は伴わないが社会改善の思考力・判断力を目指す学習」とし、後者を育成する学習を「社会への参加の仕方が分かり、行動を伴う社会参加の態度の育成を目指す学習」としている¹⁰⁾。

そこで本研究では、社会科学習導入期において育成すべき社会参画の力とは、一つは「社会の課題解決を目指した思考力・判断力」であり、またもう一つは、「社会参画の態度」とする。その両者をともに育成する単元開発を行うことでよりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎となる力に結びつくものとする。

2 研究仮説の設定及び検証の視点

(1) 研究仮説

「自分とのつながりイメージ図」を活用し、地域社会とつながる課題を追求した二方向からの単元構成を行えば、社会科学習導入期における、社会参画の力を高めることができるだろう。

(2) 検証の視点

検証に当たっては、次の3点について検証を行うこととする。

(1)	社会の課題解決を目指した思考力・判断力は育成できたか ア 毎時間ごとの評価規準の達成状況と思考の変容 イ 個における思考の変容
(2)	社会参画の態度は育成できたか ア 2回の見学活動前後の児童の社会的な見方・考え方の比較 イ 「自分とのつながりイメージ図」の活用状況
(3)	二方向からの単元構成により、社会参画の力は育成できたか

3 検証授業の計画・実践

(1) 検証授業

ア 単元名・対象

「わたしたちのくらしと商店の仕事」

第3学年 31名

イ 期間

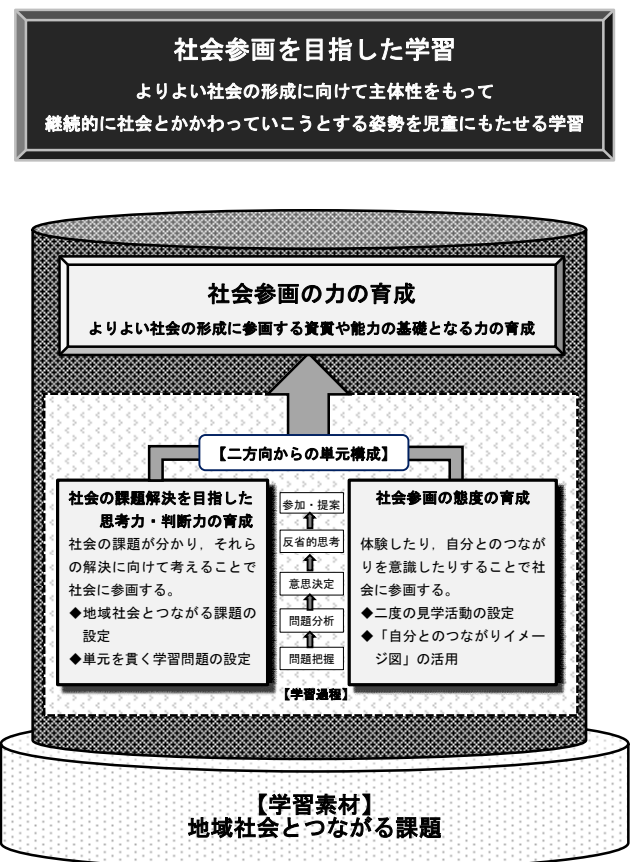
平成25年12月2日～平成26年1月9日

(2) 指導計画の作成

「知識の構造図」をもとに「社会参画を目指した学習」の構想図を用いて「単元構成と評価基準および振り返りから見る社会の形成に参画する資質や能力を見取る視点」の表(別添参照)を作成した。

(3) 社会科学習導入期(小学校第3学年)での社会参画を目指した学習の構想

前項の先行研究をふまえ、社会科学習導入期である小学校第3学年の児童にとっての「社会参画を目指した学習」について構想し、図1のように示す。



1 「社会参画を目指した学習」の構想図

ア 社会の課題解決を目指した思考力・判断力を育成するための工夫

社会の課題解決を目指した思考力・判断力とは、地域社会とつながる課題を追求する過程で浮上する連続した問いの解決に向けて、児童が思考を深める活動を取り入れ、調べたことを、比較、関連、総合、再構成して社会的事象の意味を考える力とする（表2）。

表2 思考・判断の類型

比較（比べる）	○複数の情報を比べる ○違いや共通点から特性や変化、傾向など
関連（つなげる）	○相互関係に着目し、社会的事象の意味（働き、役割）を考える ○条件に着目し、社会的事象の特色を考える
総合（まとめる）	○抽象化する（つまり～といえる）
再構成（組み立て直す）	○わかったことをもとにして自分なりの考えをまとめる＝判断 ○価値や課題について判断し自分の考えを組み立て直す、意見や主張をまとめる ○新たな問いをもつ

澤井陽介『小学校社会授業を変える5つのフォーカス「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を培うために』図書文化、2013年、60-65頁より作成。

(7) 地域社会とつながる課題の設定

学習指導要領において、小学校第3、4学年の学習内容に地域学習が位置付けられていることは周知のとおりである。

橋本は、社会改善の思考・判断力を育成するための必要な要素の一つに、地域社会とつながる課題の設定をあげている。またその課題は、社会の中で改善の必要性が感じられる問題、特に時事問題を取り上げるのがよいとし、社会参加の態度を育成するためには、地域の中で自分たちでも参加でき、地域に働きかけ、地域の協力が得られるものがよいとしている¹¹⁾。

そこで本単元では、子どもたちの身近にある地域社会とつながる課題として、「毘沙門通り商店街の活性化」を扱うこととする。「毘沙門通り商店街」は児童の通学路沿いにあり、店があることは認識しているが、商店街であることに気付いていないと思われる。また、活性化を願う商店街の人々および地域住民の課題は、児童にとっても解決の必要性が感じられる地域課題であり、課題を追求することにより、店の工夫が分かるだけでなく、地域をより身近に感じることができると考える。

(イ) 単元を貫く学習問題の設定

本単元では、単元を貫く学習問題として「私たちのくらしと商店の仕事はどのようにつながっているのだろう」を設定した。児童は、第2時で自分の予想を立て、「どのように」「なぜ」と問いながら、最終時に向かって思考を深めていく(図2)。また、この思考の流れを体系化する知識の構造図を、国立教育政策研究所が示している評価規準に照らし合わせて作成した。知識の構造図は、本単元で身に付けたい力を明確にし、教師側の単元全体の構造的な捉えや見通しに役立つとともに、毎時間の児童の概念的知識の定着にも役立つものである。

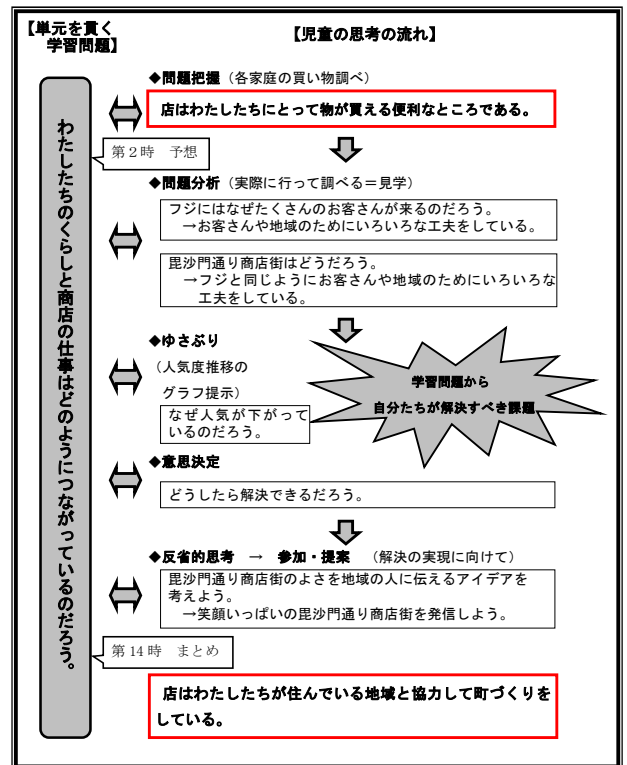


図2 単元を貫く学習問題に対する児童の思考の流れ

イ 社会参画の態度の育成

社会参画の態度とは、地域社会とつながる課題を背景に、見学活動や社会参加体験を通して、児童が自分と社会とのつながりを意識し、よりよい社会への在り方や自分たちの社会へのかかわり方を考えようとする態度とする。

(7) 2回の見学活動の設定

社会科学習導入期の児童にとって社会的事象を直接体験することは、目に見える事象を抽象化し、概念化することに役立つ。本単元では、2回の見学活動を設定している。1回目の見学で習得した社会的な見方・考え方を、2回目の見学で活用する。児童自身の社会認識のずれを発見させることで、児童の社会的な見方・考え方を広げ、深めることにつながると考える。

(イ) 「自分とのつながりイメージ図」の活用

キャリア教育¹²⁾

において小学校第3学年では、「友だち」、「自分の生活を支えている人」と関わることを重視し、「日常生活や学習と将来の生き方との関係に気づく」ことや、「計画づくりの必要性」などの態度の育成

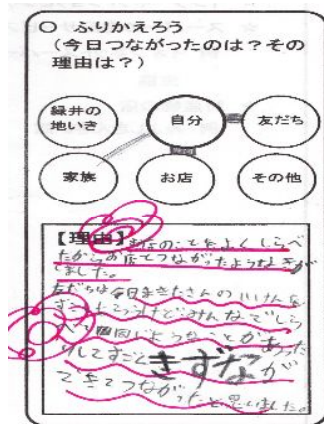


図3 「自分とのつながりイメージ図」

成について述べられている。小学校第3学年の発達段階では、自分と社会的事象とのつながりを明確にする視点をもつことが難しいと考えられるため、「自分とのつながりイメージ図」を活用することとする。本単元では、図3のように「家族」、「友だち」、「店」、「緑井の地域」を提示する。毎時間の学習の振り返りを行う際に、自分とのつながりを感じたものを線で結び明確化する。これは学んだことを自分のこととして捉え、社会の一員であるという自覚を促すのに有効であると考えられる。

4 検証授業の分析と考察

(1) 社会の課題解決を目指した思考力・判断力は育成できたか

ア 毎時間ごとの評価基準の達成状況と思考の変容

児童の毎時間のワークシートから、単元を貫く

学習問題「わたしたちの暮らしと商店の仕事はどのようにつながっているのだろう」に対し、児童自身の課題としてより迫れているのはどの時間かを分析した結果、第14時、第7時が顕著であることが明らかになった(図4、表3)。なお、第7時については、次の項で詳しく述べることにする。

目標への到達度が一番高かった第14時は、最終時であるとともに、単元を貫く学習問題に対しての説明が求められる場面であった。

すべての児童が、評価基準をおおむね達成できた3以上となり、販売にかかわる仕事と私たちや地域とのつながりがあることを記述している。表3の類型にあてはまるような思考の深まりがみられた児童は全体の43%であった。

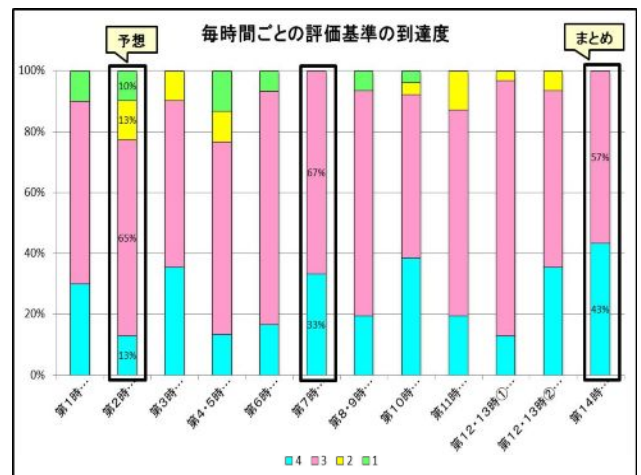


図4 毎時間ごとの評価基準の到達度

また、単元を貫く学習問題に対して、予想とまとめを行った第2時と第14時で見取った思考・判断・表現の観点別評価を比較すると、第14時において全児童の思考・判断・表現の力が伸びていることが明らかである。

表3 思考の類型と児童の主な記述

思考の類型	児童の主な記述
総合	<ul style="list-style-type: none"> ○お店は買う人のことを考え、工夫をして商品売っていることが分かった。 ○自分と店との関係は、売ると買うになっている。
再構成	<ul style="list-style-type: none"> ○緑井の地域の店は協力して、お客さんが笑顔で買い物できるようにがんばっている。 ○店の人が工夫や苦勞をしていることが分かった。 ○他地域はどのようにしているのか。他地域の販売の様子を知りたい。

以上から、本單元における社会の課題である毘沙門通り商店街の活性化の課題を考えることにより、児童の思考は、具体から抽象へ、調べて分かることから考えて分かることへと変容し、課題解決に向けて考えることができたと推察できる。

イ 個における思考の変容

二つの事例から、思考の変容を考察する。

まず、思考の深まりにおいて課題のあるA児についてである。A児は、第2時で立てた予想に学習内容とずれがあり、第14時においてもその思考に変容が見られなかった児童である（表4）。

表4 A児の具体的な記述

第2時	第14時
家族と一緒にくらしている。	店の人は働いている。

A児は、第3時からワークシートに「店の工夫」という記述を何度もしているものの、店の工夫とは具体的にどんなものなのかについて理解にいたっていなかった。そのため、「笑顔で声かけをする」、「値段を安くする」、「ポイントサービスをする」などの店の工夫の要素に気付いているものの、それを店の工夫として概念化することができなかった。具体的な手立てとして、第2、14時のほかに、観点別評価の思考・判断・表現を中心に見取った第3、6時において、毎時間のワークシート上の記述だけでなく、自己の振り返りの記述と合わせて、思考のずれを見取り適切な言葉かけをすることが重要であったと思われる。

次に、大きな思考の変容が見られたB児についてである。第11時では、児童の社会認識をゆさぶる資料として、図5に示す緑井地区の集客低下のグラフを提示した。

児童の反応は次のようであった。

「(グラフが)下がってる。」「(祇園地区に)人気度がぬかれとる。何でだろう。」「このままいくと人気がなくなって、人も少なくなって店がつぶれてしまう。」「お客さんが来ないと店の人の給料が減るかなあ。」「みんな、毘沙門通り商店街のいいところ知らんけん、教えてあげたらいい。」

この学習の後、毘沙門通り商店街の活性化について「どうしたら解決できるのだろう」と新たな問いを立て、商店街のよさを伝えるアイデアを提

案した。それに対し、反省的思考を促すものとして、毘沙門通り商店街会長、緑井まちづくり株式会

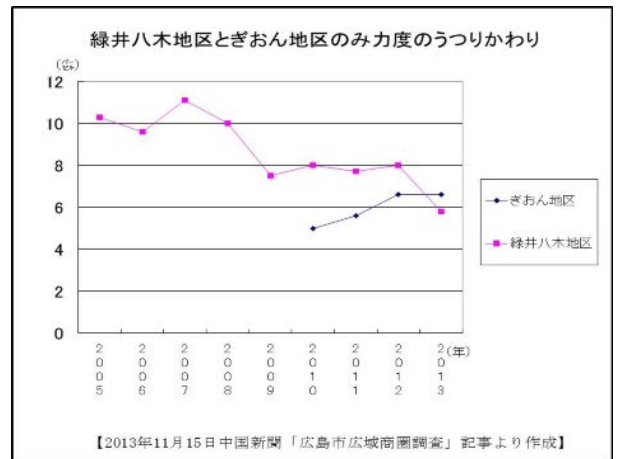


図5 第11時で提示したグラフ

社の方にコメントをいただき、立場を明確にした企画書づくりを行った。

B児は、第11時において「町をカラフルにしておもしろい町にする」とし、緑井まちづくり株式会社の方から図6のようなコメントをいただいた。パンフレットを読んで、緑井にはどんな人が住んでいるのかと考えた結果、6月に盲導犬の学習でお世話になった方を想起し、「目の不自由な方が笑顔になる毘沙門通り商店街」を再提案し、図6中①、②のように、これまでの学習から得た知識を生かしながらまとめを行った。

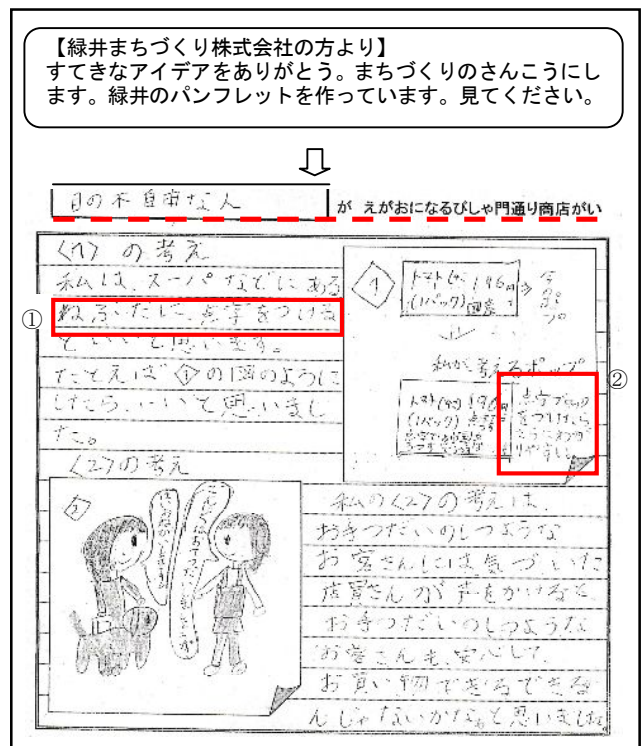


図6 B児の企画書

学級全体としては、96%の児童が、消費者の立場を明確にし、具体的な内容でまとめをした（違う地域から来る人 33%、初めて来る人 29%、おうちの人 23%、子ども、外国の人、目の不自由な人各 3%）。

以上のようなゆさぶりと反省的思考を通して、児童は、自分のアイデアを再構成し、企画書の作成に生かすとともに、「店は私たちが住んでいる地域と協力して町づくりをしている」という概念を形成し、店と自分たちとが、売買以外の関係においてもつながりがあることを記述した。

このような学習過程を通して、児童の社会的な見方・考え方が深まり、児童にとっての「学習問題」は、「自分たちが解決すべき課題」へと変容していったといえる。

(1) 社会参画の態度は育成できたか

ア 2回の見学活動前後の児童の社会的な見方・考え方の比較

店の工夫について学ぶために、表5のように、予想、見学、まとめを含む2回の見学活動を設定した。

表5 見学活動にかかわる授業時間

	1回目(フジ)	2回目(毘沙門通り商店街)
予想	第3時	第7時
見学	第4・5時	第8・9時
まとめ	第6時	第10時

第3時では、店の工夫について、品物、サービス、その他(立地条件、店の形態)など、目に見えるものや既存の社会認識から予想を立てているものがほとんどであった。また、それを調べる方法として「見る」、「質問する」が中心で、店と客という立場から見学に臨んだ。

これに対し、第7時では、店の工夫について、利益追求と社会貢献の視点から予想を立てていた。質問については、「買い物客に(対して)」「お店の人に(対して)」というように客の視点、店の視点という双方向から準備をし、質問内容も明確になっている。

また、見学後の記述については表6に示すとおりである。

表6 見学のまとめの児童の記述と到達度

時	記述内容	到達度
第6時	調べたことをもとに、売る側や買う側の願いを自分の生活と結びつけて記述	94%
第10時	地域の販売と特色について記述	92%
	一般化された特色を記述 ◆「ほとんどの店にはサービスがあり、お客に笑顔で喜んで買い物をしてもらうための工夫があった。」 ◆「お客さんのためや緑井の地域のことを考えてイベントやサービスをやっている。」	38%

以上から、2回の見学は社会的な見方や考え方を深めるうえで役立つとともに、「買う人に対する店の工夫」という視点だけでなく「地域の一員としての店の工夫」を考える視点ももつことができ、児童の社会参画の広がりや深まりにおいても効果があったと考えられる。

イ 「自分とのつながりイメージ図」の活用状況

児童が自分を基点として、どのような社会的現象とつながったのかを「自分とのつながりイメージ図」の活用状況から考察する(図7)。

2回の見学活動(第4・5時、第8・9時)では、クラスの全員に近い児童が店とのつながりを強く感じている。それとともに全体を通して店とのつながりが増加している。また、見学を通して地域とのつながりが増加傾向である。

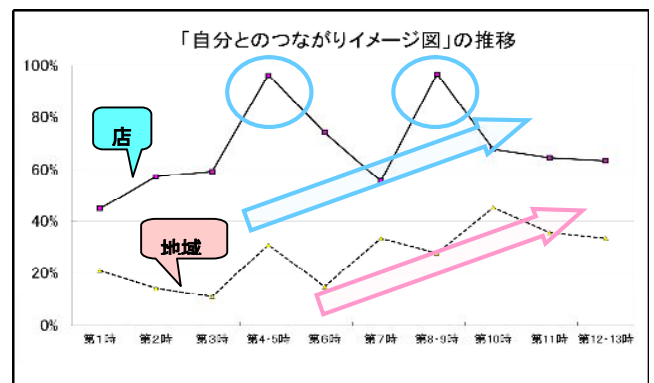


図7 「自分とのつながりイメージ図」において店、地域とをつないだ児童の割合

このことから児童は見学を通して店だけでなく、地域へもつながりが広がっていることが分か

る。また、第10時以降、「その他」とつなぐ児童が30%に達している。これは、その他として「毘沙門通り商店街」を挙げるとともに、自分を基点としない、「地域」と「毘沙門通り商店街」をつなぐ児童が増えたことに起因している。

(3) 二方向からの単元構成により、社会参画の力は育成できたか。

児童が二方向からの単元構成により、社会参画の力を育成できたかについて児童の作品とデータ分析から考察をする。

図8は、C児の今までの学習をもとにした店の工夫についてのまとめである。

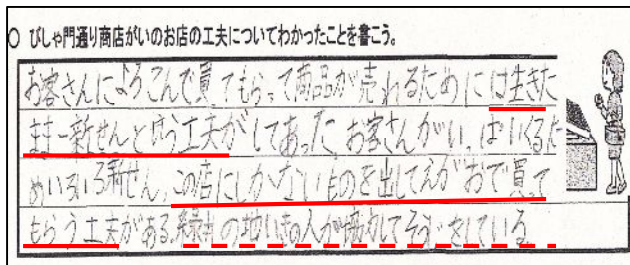


図8 C児の学習のまとめ

図中の実線部は利益の追求に関する店の工夫、破線部は社会貢献にかかわる概念的知識である。これをもとに、C児は図9のように第14時（最終時）の「つながりイメージ図」を作成した。なお、第14時は、自分以外の社会的事象は、ばらばらのカードとして児童に配布し、自由に並べるようにした。

C児は分かったことをもとに、店の利益追求にかかわる内容、社会貢献にかかわる内容を図式化した。また、自分を基点とするだけでなく、店と地域ともつないでいる。そして、思考の深まりの一つの姿である、「買う人、売る人」の類型化も行った。

学級全体としては、C児と同じように売る人、買う人として自分や家族、店を類型化する視点、店どうしの協力をつなぐ視点のほかに、他地域内においても同じような関係性があるのではないかという視点など様々な視点があった。

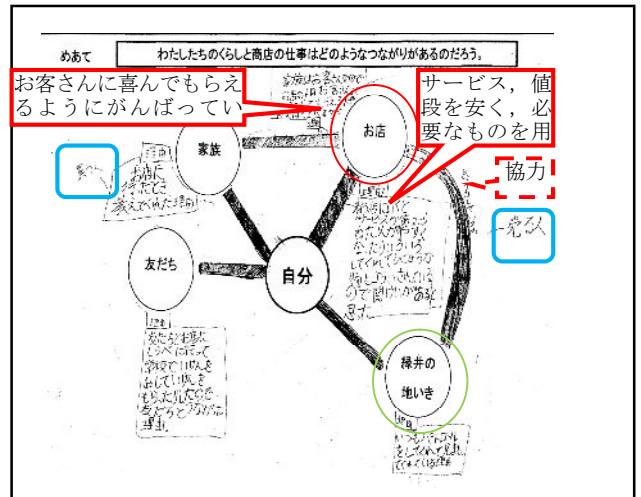


図9 C児の最終時の「自分とのつながりイメージ図」

また、表7のような分析を行った。

分析の結果、「社会の課題解決を目指した思考力・判断力」と「社会参画の態度」の間には、強い相関関係が認められた。このことから二つの力をともに育成することで、相乗効果が生まれるといえる。

表7 「社会の課題解決を目指した思考力・判断力」と「社会参画の態度」の相関

(Pearsonの積率相関係数) n=31

	社会の課題解決を目指した思考力・判断力
社会参画の態度	0.67*

*p<.05

以上のような児童の作品の考察や、統計処理から、「社会の課題解決を目指した思考力・判断力」や「社会に参画する態度」を育成する二方向からの単元構成により、「社会参画の力が育成」され、「社会参画を目指した学習」が成立するといえる。

V 研究のまとめ

1 成果

本研究で活用した「自分とのつながりイメージ図」の成果を2点挙げる。

1 点目は児童の社会参画への態度が形成されていく過程の可視化である。教師は、児童の社会とのつながりや広がり、深まりの変容を見取るのに役立ち、また児童にとっては、毎時間の振り返りを通して、常に自分と社会とのつながりを明確にし、社会の一員であるという意識付けになったと考える。社会科学習導入期であるからこそ、考えたことをまだうまく表現できない児童にとって、線をつなぐという容易な作業を通して自ら考えたことを比較、関連、総合、再構成しながら概念的知識を培うのに効果があったといえるだろう。

2 点目は学習形態への示唆である。「自分とのつながりイメージ図」において、友だちとつないでいた児童は毎時間 30%を超え、特に見学前の予想をもつ第3時、第7時では、平均で60%を超えていた。これは、友だちの意見を取り入れたり、一緒に活動をしたりしたことが、自分の考えを再構成する手立てとなり、他者とのかかわりに喜びを感じている児童が多くいたからである。改めて社会参画を考える時、学校生活の中で一番小さな社会である学級における良質なコミュニケーションを通じて互いに学び合う経験を積み重ねることが、社会参画を目指す学習の基盤となるものである。今後、他の単元、他の学年でも児童相互の学び合いが生まれる学習形態を単元計画の中に位置づけ、実践を行ってみたい。

2 課題

本単元において、ワークシートの記述による観点別評価の到達度は平均で91%となっている。このことから全体としては概ね学習のねらいに到達しているといえる。

しかし、学習後の評価テストの結果からは、思考力・判断力・表現力がC評価の児童が2割程度見受けられることも明らかになった。それは、社会科学習をスタートさせたばかりの小学校第3学年の児童にとって、見学や資料の読み取りなどの習得が不十分な状態で、思考や判断を求めることの難しさともいえる。見学活動後に、「店の工夫と

は具体的にどんなものが挙げられるのか」と問い、習得した内容を具体化し整理する手立てを確保した後、思考・判断を問う必要がある。社会科学習導入期は、これからの社会科学習の学び方を学ぶ時間も含め、社会科の年間カリキュラムの見直しを行い、習得と活用のバランスを考えながら児童のつまずきを見取り、児童の社会参画を目指した学習づくりを行っていく必要があるだろう。

【引用文献】

- 1) 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』, 2008年, 12頁
- 3) 唐木清志, 西村公孝, 藤原孝章『社会参画と社会科教育の創造』学文社, 2010年, 75頁
- 4) 7) 10) 11) 橋本祥夫「社会参画の2方向性に着目した社会科学習の展開—単元「エネルギー問題を考えよう」を事例に—」『京都教育大学紀要』2013年
- 5) 9) 唐木清志『子どもの社会参加と社会科教育 日本型サービスラーニングの構想』東洋館出版社, 2008年, 64頁
- 6) 澤井陽介『小学校社会授業を変える5つのフォーカス「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を培うために』図書文化, 2013年, 18頁
- 8) 1) 同掲書, 5頁
- 12) 文部科学省『小学校キャリア教育の手引き(改訂版)』, 2011年, 10-11頁

【参考文献】

- 1) 北俊夫『社会科学力を作る“知識の構造図”』明治図書, 2011年
- 2) 小原友行『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン 小学校編』明治図書, 2009年
- 3) 澤井陽介「社会科における社会参画への意欲や態度の形成」『初等教育資料』3月号, 2012年
- 4) 村瀬隆広「社会参画への意欲や態度を形成する学習指導の工夫」『初等教育資料』3月号, 2012年